

## 「第2回 静止衛星データ利用技術懇談会」の議事概要

### 1. 懇談会の概要

日時：平成22年3月16日（水）13:30～15:30

場所：気象庁大会議室（5階）

出席者：

中島座長、小池副座長、下田、高村、高藪、中島、中村、森山委員  
小澤気象庁観測部長、藤村計画課長、川津気象衛星課長、  
佐々木総務部参事官、橋田企画課長、  
石原気象研究所気象衛星・観測システム研究部長、  
木村気象衛星センターデータ処理部長

### 2. 懇談の概要

#### （1）懇談項目と主なポイント

- 1) 大学等研究機関における静止衛星データ利用技術の現状と課題について
- 2) 国内の調査・研究の推進についての助言
- 3) その他

懇談項目に沿って、事務局から資料の説明後、懇談が行われ、主なポイントは次のとおり。

- ・ 本懇談会のように、気象庁と大学等の意見交換の場を設けることは重要である。将来の静止気象衛星や、より広範な利用につながる検討を進めるためにも、本懇談会を将来にわたって発展させていくことが適当である。
- ・ 次期衛星で実現される高頻度の観測データは、局地的な豪雨をもたらす対流雲の監視に大いに貢献するものと期待する。
- ・ 平成22年度内に、気象研究コンソーシアムを活用し、気象衛星データを用いた研究を進める仕組みを整える。
- ・ さらに、気象研究コンソーシアムのみならず、より幅広い分野の研究者にも「ひまわり」データが使えるような仕組みを考えていくべきである。

#### （2）主な意見交換内容

<大学等と気象庁の連携について>

委員：静止気象衛星「ひまわり」のデータは、現行の衛星も今後の衛星も、大学等の研究コミュニティと気象庁が連携して利用技術開発をしていくことが重要である。これにより、より一層社会の利益につながると期待できる。その意味で、本懇談会の議論の意義は大きい。

委員：将来の静止気象衛星につながっていくためにも、例えば JAXA における静止衛星開発の可能性検討と一緒に検討してみるというふうに、長期

的な視野に立ったロードマップのもとで技術的な協議を重ねていけば、いろいろなアイデアが出てくるかもしれない。

委員：本懇談会のような気象庁と大学等の意見交換の場を設けていくことは重要である。本懇談会は今後どのように継続させていくのか。

気象庁：本懇談会は、今年度から最初の2年間は主に技術的な検討を行い、その後は、懇談会のメンバーを発展させ、防災機関やマスメディアなどさらに広範な利用者に「ひまわり」データを使っていただくための議論を深めていきたい。

委員：「ひまわり」は、防災機関やマスメディアをはじめとして広く国民一般に使われていて、わが国の国民生活に最も近いところで利用されている衛星であると言える。このため、研究のみならず、子供の教育など、より広範な活動に発展していくことを期待する。

<次期衛星「ひまわり8号及び9号」の観測機能の向上について>

委員：次期衛星で実現される高頻度観測は、積雲対流の時間変化を捉えることに有効である。観測時間間隔が短いので、対流雲の発達過程の中でのステージにあるかを把握できる。これにより、実況監視のみならず、モデル検証にも役立つはずである。また、熱帯域の対流のメカニズム解明にも重要となるであろう。

委員：局地的な豪雨の監視能力の向上に、次期衛星の高頻度観測が貢献できると期待する。国土交通省のXバンドレーダーなど地上観測との重ね合わせによって、防災に資する情報として市民に提供できるようになればよいのではないか。

委員：「ひまわり」の可視赤外放射計（イメージャ）の輝度温度データの精度評価に基づいた調整をきちんとするためには、製造業者による打ち上げ前の試験のみならず、衛星運用開始後においてもずっと継続して調整していく必要がある。

委員：イメージャは米国製であり、米国技術輸出規制（ITAR）のため詳細な技術情報が示されないのが現状であるが、可能な範囲内で研究者が協力できる仕組みを考えてはどうか。

気象庁：ITARを遵守する必要があるので、ITARの許す範囲内で提供できる情報は提供していきたい。一方で、気象庁においても技術開発に努めていきたい。

<気象研究コンソーシアム等を活用した衛星データ利用研究体制について>

委員：前回のご議論を踏まえ、気象庁と日本気象学会による気象研究コンソーシアムにおいて、衛星データの利用・開発研究やアルゴリズム開発研究についても取り扱う方向であり、日本気象学会の理事会で検討いただいている。今後、平成22年度内の実現に向けてさらに調整を進める予定である。

委員：日本気象学会としてはウェルカムである。特に、気象庁側から提案があったことは画期的なことである。

委員：気象研究コンソーシアムの研究範囲を広めに公募してはどうか。研究課題名を「気象衛星データを用いた研究」（仮称）とし、その中には例えばラピッドスキャン観測データを用いた研究とか色々な研究が含まれるというふうにするべきではないか。

委員：次期衛星は、気候・地球環境をオペレーショナルに監視していくことが大事なミッションになる。このため、気象研究コンソーシアムにおいても気候・地球環境の研究を含めてしっかり推進していくことを考えるべきである。

委員：また、気象研究コンソーシアムのみならず、例えば植生といった環境分野、土木分野など、他分野の研究者にも「ひまわり」データが使えるような仕組みを作るべきである。気象研究コンソーシアム「等」としてほしい。

委員：例えば JAXA の開発衛星であれば無償で共同研究する研究者を公募し、共同研究契約した研究者達に研究用のデータを提供してプロダクトを作るような仕組みがある。このようなことを戦略的に検討してみる価値はあるのではないか。

### (3) 今後の予定

次回（第3回）は、気象研究コンソーシアムや気象庁の技術開発検討の進捗状況等について、平成22年9月3日（金）に開催する予定。